

母への感謝

鹿児島大学病院 脳神経内科 武 義人

今日は、私の生き立ちと、母への感謝をこの場を借りて伝えたいと思います。

私は一人っ子で父と母と3人暮らしをしておりました。6歳の時に一軒家を建て、幸せな一戸建て生活を送っていました。庭にはガーデニング、3匹のウサギを飼って、小学校の同級生を家に招いて遊んだり、たまには家族で旅行に行ったりして、側から見れば特に不自由ない生活だったと思います。しかし、その幸せはそう長くは続きませんでした。

7歳の時に両親の離婚を機に、アパートに引越し、母と二人で暮らし始めました。私は転校し、新しい環境で、不安と期待の入り混じった複雑な気持ちで新生活を始めました。幸い転校先でも友人に恵まれ、楽しく新生活を送ることができました。母は元々専業主婦でしたが、これを機に仕事を始めました。慣れない仕事で、毎日遅くまで働いて、帰ってきてからは食事を作ってくれて、今思えば、とても大変な生活を送っていたと思います。生活はそう裕福ではなく、特別旅行などに行くこともありませんでしたが、母は食事の栄養面だけはいつも気を配ってくれていました。いつも手作りの晩ご飯が出てきて、サラダやお味噌汁、ご飯におかず、といったように、バランスの取れた食事ばかりでした。そのお陰もあって、私は大きな病気にかかることがなく過ごすことができました。私は母に特別勉強を教えてもらったことはありませんが、いつもテストで良い点数をとると、ビックリするくらい褒めてくれて、嬉しくなって次も頑張ろうと思い、おかげでいつも好成績を収め

ていました。母は褒めて伸ばす天才だったのかもしれません。その流れで中学校でも成績は良く、自分の目指していた高校に進学することができました。

これまで良かったことばかりを述べてきましたが、やはり母と子二人だけというのは、辛いこともありました。授業参観や、運動会などで、両親のいる友人などを見ると「なんで自分には母しかいないのだろう」ととても寂しい気持ちになり、母に当たったこともあります。母はいつも優しく宥めてくれて、それでも私は母に酷いことを言って、当時の自分はとても幼かったなど反省します。

私は高校生の時に医師を志し、医学部を受験しました。しかし、高校生の時は趣味の音楽に没頭してしまい、とても現役で受かるような成績ではありませんでした。そして案の定、現役での受験は失敗に終わりました。母に頭を下げて、一浪だけさせてもらうことになりました。その1年間は予備校にも通わせてもらい、ラストチャンスだと思い必死に勉強しました。その甲斐あって、一浪で念願の医学部合格を果たすことができました。中学、高校と相変わらず、生活はギリギリでしたが、その環境の中でも浪人させてもらい、予備校の費用も母が出てくれました。

そして大学生となり、私は母を少しでも楽にしてあげたいと思い、奨学金を大量に借りて大学時代を過ごしました。無事国家試験にも合格し、今年で医師となり3年目になりました。ようやく母に今までの恩返しをできるくらいに余裕が出てきました。これまで女手

一つで私を育てくれた母には感謝の気持ちでいっぱいです。今まで特に旅行などに行く機会がなかった母を、これからは私が旅行に連れて行ったり、美味しいお店に連れて行ったりして、親孝行していきたいと思います。

今日の日本では、母子家庭は増加傾向があり、あまり珍しくありません。母子家庭は、父の収入が無い分、やはり塾などにはなかなか通わせてもらえず、勉強の面では少し不利な家庭が多いと思います。私も勉強する環境に恵まれた方だったとは思いませんが、夢に向かって努力すれば、医師にもなることができました。これを読んで少しでも勇気づく同じような家庭の方がいらっしゃれば幸いです。

拙い文章ですが、読んでいただきありがとうございました。



次号は、鹿児島大学病院脳神経内科 神田佳樹先生
のご執筆です。
(編集委員会)